

人間と宇宙

リサーレ・イ・ヌール全集より
第二十三の言葉

書名：人間と宇宙

著者：ベディーウッザマン・サイード・ヌルスィー
トルコ語からの翻訳：ナオキ・ヤマモト

発行所：レイハン出版

発行日：2026年1月

印刷所：IMAK（イマク）〔イスタンブル〕



著作権 © レイハン出版 2026

ISBN: 978-83-63796-26-6

リサーレ・イ・ヌール全集より

人間と宇宙

サイード・ヌルシー



2026年1月

信仰は、人を「人間」にする。
それどころか、人を「王者（スルタン）」
とさえする。

第二十三の言葉

(この言葉には二つの議論がある)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
لَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ فِي أَحْسَنِ تَقْوِيمٍ ثُمَّ رَدَدْنَاهُ
أَسْفَلَ سَافِلِينَ إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ

慈悲あまねく、慈愛深きアッラーの御名に
おいて。

「まことにわれは、人間を最善の姿にて創造した。されどその後、彼を最も下劣なる者の中に落とした。信じて善き業を行う者たちを除いて。」 (クルアーン95:4-6)

第一の節

信仰のもたらす幾千の美德のうち、ここでは「五つの点」において、五つのみを明かそう。

第一の点：

人間は、信仰の光によって最高の高みへと昇り、樂園にふさわしい価値を得る。しかし、不信仰の闇に落ちれば、最も卑しき存在へと堕ち、地獄にふさわしい立場に陥る。なぜなら、信仰とは、人を莊嚴なる創造主へと結びつけるものであり、信仰とは一つの「所属」であるからである。この所属を通して、人の内に現れる神の精妙なる技芸や、主の御名の美しき徴により、人は価値を得るのだ。だが、不信仰はこの関係を断ち切る。

その断絶によって、主の技芸は隠されてしまい、人の価値は物質的な面にのみ限られてしまう。そして物質とは、儚く、滅びゆき、ただ一時の動物的な命にすぎないゆえ、その価値は無に等しいのである。

この真理を、ひとつの喩えをもって明らかにしよう。たとえば、人間の手による工芸において、素材の価値と技巧の価値とは、それぞれ異なるものである。あるときは両者が同等であり、またあるときは素材のほうが価値高く見えることもある。だが時には、五銭ほどの鉄の素材に、五リラに値する技術が施されていることもある。さらには、時に骨董とされるある工芸品が、百万の価値を有するにもかかわらず、その素材自体は五銭の値打ちすらないことさえある。かかる骨董の工芸品が、もし骨董商の市に持ち込まれ、非凡な腕をもつかつての名工に帰せられ、その名を讃えつつその技の証として展示されるならば、百万円の価値で取り引きされる。だが、もしそれが粗野な鍛冶職人の市場に並べられれば、五銭の鉄くずと同じ値で買われるに過ぎない。

——さて、人間とはまさに、このような骨董品のごとき、稀有なる神の創造の妙技である全能なる主の御力による最も繊細にして優美なる奇跡のひとつであり、神のすべての御名の輝きを宿し、その御名の精妙な模様を映す鏡として、さらに全宇宙を縮図

のごとくに写す小宇宙として造られた存在である。

もし、信仰の光が人の内に差し込めば、人の上に刻まれたすべての意味深い模様は、その光によって読み取られるようになる。信仰者は、その模様を意識と理解によって読み、また創造主とのつながりによって他にもその意味を読ませる存在となる。

すなわち、「私は荘厳なる造り手の作品であり、被造物であり、その慈愛と恩寵にあずかる者である」といった意味が、人の内において神の工芸として顕わになる。つまり、創造主へのつながりである信仰こそが、人に宿る神の技巧のあらゆる徴（しるし）を明らかにするのである。ゆえに、人間の価値は、その神的技巧に応じたものであり、また「永遠なる御方の鏡」という性質に依拠している。かくして、見かけはつまらぬ存在に思えるこの人間が、この視座においては、全ての被造物を凌ぐ、神の対話相手としての資格を持つ者、そして樂園にふさわしい神のもてなしを受ける客人となる。だが、創造主との関係を断ち切ること—すなわち不信仰—が人の中に入り込め

ば、そのとき、人の上に刻まれた神の御名の意味ある模様は、すべて闇に覆われて読めなくなる。なぜなら、創り手が忘れられれば、創り手に向かう精神的な方向性もまた理解されなくなり、まるで人は頭を下にして堕ちてしまうがごとく、それら崇高なる技巧や意味深い模様の多くが隠されてしまう。かろうじて残る、目に見えるわずかな部分も、卑しい原因や自然、あるいは偶然に帰されて、ついには価値を失い、本来は輝くダイヤモンドであったものが、光を失ったただのガラスのように落ちぶれてしまう。

このとき人の価値は、ただ動物的な物質性にのみ見出されることになり、その物質の目的と果実は――すでに述べたように――短く儚い生のあいだ、もっとも弱く、もっとも必要に満ち、もっとも悲しみに満ちた存在として、わずかな生命を過ごし、やがて朽ち果てていくにすぎない。かくのごとく、不信仰とは人間の本質を崩壊させ、その価値をダイヤモンドから炭へと変えてしまうのである。

第二の点

信仰（イーマーン）は、いかにして光であるか。

信仰は、いわば光である。人間の存在を照らし出し、その上に記された全ての「永遠なる主の書簡」を読み解かせる。そればかりでなく、信仰は全宇宙をも照らす。過去と未来という時の両端に潜む闇を拭い去るのである。この奥義を、次のクルアーンの聖句に秘められた意味の一端として、私が幻視の中で見た象徴的な夢によって明かそう。

اللَّهُ وَلِيُّ الَّذِينَ آمَنُوا يُخْرِجُهُم مِّنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ

「アッラーは信じる者たちの保護者であり、彼らを諸々の闇から光へと導き給う。」

（クルアーン2:257）

——幻視の中で、私は次のような光景を見た。二つの高い山が向かい合っており、その間に恐ろしげな一本の橋が架かっている。橋の下には、深々とした谷が横たわっていた。私はその橋の上に立っていた。このとき、世界全体は濃密なる闇に包まれ、すべての方角が黒き暗黒に覆われていた。右を

見やると、果てしない闇の中に、巨大なる墓が見えた——あるいはそう思われた。左を見れば、恐ろしいほどの闇の波が打ち寄せ、その中で巨大な嵐と混乱、災厄が渦巻いているのを感じた。

橋の下を覗き込むと、底知れぬ断崖絶壁が広がっているように見えた。私は、その恐るべき暗闇に立ちすくみながら、かすかな懐中電灯を手にしていて。それを点けて照らすと、ぼんやりとだが、恐怖すべき光景が現れた。目の前の橋のたもとや周囲に、恐ろしき竜や獅子、怪物どもがうごめいているのが見えた。

私は思った。

「むしろこの懐中電灯など無ければよかった。こんな恐ろしいものを見ずに済んだのに。」

光を向ける先々で、次々と恐怖が現れる。「嗚呼、この懐中電灯こそ我が災厄だ」と私は叫んだ。

そして怒りを覚え、その懐中電灯を地面に叩きつけて壊した。

ところが、その瞬間である。まるで、世界を照らす巨大な電灯のスイッチが入ったかのように、その暗闇は一気に引き払われ、四方がまばゆき光で満たされた。すべての物の真の姿が明らかとなった。見ればあの恐怖の橋は、実は整然たる平原の中に通る一本道であり、右に見えた巨大な墓所は、実際には、輝く緑の庭園に満ち、光り輝く人々が信仰と奉仕と交わりと祈りに集う祝福の会所であった。また、左手にあった嵐や混乱と思われたものは、

実は愛らしく、魅惑的な山々の背後に広がる大宴席であり、美しき景勝地、静けき憩いの場であったのだ。さらに、先ほどまでは竜や獅子と見えた怪物たちも、よく見れば、従順で優しいラクダや牛、羊、山羊といった家畜であった。

私は感嘆の声をもって、

「アルハムドゥリッラー、信仰の光にこそ讃えあれ」

と唱え、そしてクルアーンのこの御言葉を朗誦した：

اَللّٰهُ وَلِىُّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا يَخْرِجُهُمْ مِّنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ

「アッラーは信仰する者たちの保護者であり、彼らを闇より光へと導き給う。」（バカラ章 2:257）

そのとき、私はあの幻視から覚めた。この夢の中で見た二つの山とは、すなわち「人生の始まり」と「人生の終わり」、すなわちこの地上の世界と、死後の中間世界である。そして、あの橋は「人生の道」そのものであった。右手に広がる風景は「過去の時間」であり、左手は「未来の時間」を象徴していた。私が手にしていた懐中電灯は自己中心的で、自らの理解に頼り、天啓を聞こうとしない人間の「自我」であった。そして、恐るべき怪物や猛獣に見えたものたちは、この世界における様々な出来事や、一見して奇怪に映る被造物たちに他ならなかった。

されば、自己の自我に頼り、無知と無関心の闇に沈み、迷妄の暗黒に陥った者とは、まさに幻視における私の第一の姿のごとき者である。その者は、懐中電灯のように貧弱で、迷いに満ちた知識によって、過ぎ去った過去を「巨大な墓」としか見なさず、虚無と暗黒に包まれたものとして捉える。

未来を見れば、恐るべき嵐が渦巻く混沌とした荒野として、偶然の支配する恐怖の場としか映らない。さらには、本来は英知と慈愛に満ちた御方によって支配された被造物や出来事も、その人の目には、ただ有害な怪物のようにしか映らないのだ。

このような者は、まさに次の御言葉の裁きに預かるのである：

وَالَّذِينَ كَفَرُوا أَوْلِيَاؤُهُمُ الطَّاغُوتُ يُخْرِجُونَهُمْ مِنْ
النُّورِ إِلَى الظُّلُمَاتِ (クルアーン 2:257)

されど、もし神の導きがその者に届き、信仰がその心に入り、魂のファラオのような高慢が打ち砕かれ、神の書（クルアーン）に耳を傾けるならばそのとき、彼は幻視における私の第二の姿のごとき者となるであろう。その瞬間、宇宙はたちまち昼の装いをまとい、神の光によって満たされる。

世界は次の御言葉を朗誦するのだ：

اللَّهُ نُورُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ (ヌール章 24:35)

そのとき、信仰の光により目覚めた心の眼は、過去の時の流れを、もはや「巨大なる

墓」などとは見なさない。むしろ、歴史の各時代を、一人の預言者や聖者の導きのもとにおいて、神に仕える清浄なる魂たちの群れが、それぞれの使命としての「礼拝の務め」を果たし終え、「アッラフ・アクバル」と唱えて、高次の天上的地位へと飛翔し、来世へと旅立っていく光景として映すようになる。左手を見ればそれまで不安と混沌の象徴のように見えた未来の山々は、実は、来世や中間世界の向こうに広がる、樂園の園に設けられた慈愛に満ちた宴の殿堂であり、信仰の光により、遠くからその輪郭を見て取るようになる。また、嵐や地震、疫病などの出来事も、

それらは全能にして慈悲深き主の命に従う「従順なる使者」にすぎないと悟る。春の嵐や雨のように、表面的には荒々しくとも、その内には多くの精妙な叡智と恵みが潜んでいると知る。

ついには「死」をも、永遠の命への序章と捉え、「墓」をも、永遠の幸福への入口と見なすのである。その他の事柄については、あなた自身がこの比喻を真理に照らして推し量るがよい。

第三の点

信仰は、光であると同時に、力でもある。まことの信仰を得た者は、宇宙の全てに対して恐れることなく立ち向かうことができる。そして信仰の強さに応じて、人生に襲いかかる出来事の重圧から自由になれる。彼はこう言うであろう

「私はアッラーにこそ身をゆだねる）」

そして、「人生という船」において、山のように荒れ狂う波をものともせず、確かな安らぎのうちに航海する。彼は、人生のあらゆる重荷を「全能にして絶対なる御方」の御手に委ね、安らぎとともにこの世を通過し、中間世界で憩い、やがて永遠の幸福のために樂園へと飛翔することができる。しかし、信頼を持たぬ者は、人生の重荷に押しつぶされ、飛び立つどころか、むしろ「最も卑しき低み」へと堕ちてしまうのである。

かくして信仰は唯一性を要請し、唯一性は服従を導き、服従は信頼を生み、信頼は二つの世界における幸福をもたらす。だが、誤解してはならない。

タワックル（アッラーへの信頼）とは、因果をまったく否定することではない。むしろ、因果とは「全能なる神の御手が隠れるためのヴェール」であると理解し、これを尊重しつつ—因果への取り組みを「行動による祈り」の一種と見なし、結果をもたらすものはただアッラーのみであると信じ、その成果をも神に帰し、神に感謝すること、これこそが真の信頼である。タワックルを行う者と行わない者の例は、以下の物語に似ている。

昔々、二人の男がいた。彼らはともに、腰と頭に重たい荷物を背負い、一枚の乗船券を買って、ある大きな船に乗り込んだ。一人は、乗船するや否や、自分の荷物を甲板に下ろし、その上に腰を下ろして見張りを始めた。だがもう一人は、愚かで傲慢であったがゆえに、荷物を地面に下ろそうとはせず、こう言った。

「いや、私は荷を下ろさぬ。紛失したら困る。私は力もあるし、自分の荷物は自分で守る。」

そこで人々は彼に言った。「我らを乗せ、そなたをも運んでいるこの信頼のおける王

の船は、お前よりもはるかに強く、もっと安全に荷を守ってくれるのだ。さもないければ、船が揺れたとき、お前は荷物もろとも海に落ちてしまうかもしれぬ。それに、時間が経つにつれ、体力も衰えよう。この曲がった腰と愚かな頭では、ますます重くなるこの荷に耐えることはできまい。」

さらにこうも言った。「船長がそのような姿を見れば、『この者は狂人だ、船を侮辱している』と見なして追い出すであろう。あるいは『これは悪意を持つ者であり、船を疑い、我らを嘲笑っている』とみなされ、牢に送られるやもしれぬ。皆の前で笑いものになるだろう。

なぜなら、知る人の目には—その傲慢はお前の無力さを暴き、その自惚れはお前の弱さを露わにし、その見せかけはお前の偽りと屈辱を晒すからだ。人々は皆、お前のことを笑っている。」

この言葉を受けて、その哀れな者はようやく目を覚まし、荷を地に下ろし、その上に座った。そしてこう言った。

「ああ……アッラーよ、あなたに報いがあるように。私は苦しみからも、牢からも、笑い者にされることから救われた。」

それゆえ信頼を持たぬ人よ！お前も、先ほどの愚かな男のように、ようやく思慮を取り戻し、信頼せよ。そうすれば、お前は—宇宙全体に対して物乞いするような惨めな姿からも、あらゆる出来事の前で震え上がるような怯えからも、自己顕示欲や虚飾からも、人々の笑いものとなる恥辱からも、来世における不幸からも、この世の重圧という牢獄からも解放されるであろう。

第四の点

信仰は、人を「人間」にする。それどころか、人を「王者（スルタン）」とさえする。であるならば、人間の本来の任務は、信仰し、祈ることに他ならない。対して、不信仰は、人を、ひどく無力な獰猛な獣へと墮とす。この主張の何千という証の中から、たった一つ、動物と人間がこの世にやって来る際の違いを見れば、この真理に明確な証拠があることがわかる。

いや、それは明白なる証明に他ならない。本当の人間性は、信仰によって「人間」たりうる。それは、人間と動物がこの世に送り出されるときの違いを見れば明らかである。というのも動物はこの世に生まれ出るとき、あたかも別の世界で完成を遂げてきたかのように、その天性に従ってほぼ完全な状態で生まれてくる、いや、むしろ送り出されてくる。

たとえば、動物は生後すぐ、わずか2時間、あるいは2日、あるいは2ヶ月のうちに、生きるために必要なすべての条件、世界との関係性、そして生命の法則を知り、技能を身につける。

人間が20年かけてようやく獲得するような生命活動の能力や実践的な技術を、スズメや蜂のような小動物は、わずか20日で獲得する——いや、それは「教えられる」のではなく、神に導かれるのである。

つまり、動物の本来の使命とは、「学びによって完成すること」でも「知識を得て成長すること」でも、「自らの無力を示して助けを乞うこと」、すなわち「祈ること」でもない。

むしろ、動物の務めとは、その素質に応じて、黙々と行動すること、働くこと、

行為による礼拝なのである。

一方、人間は——この世に送り出される際、あらゆることを学ぶ必要のある存在として現れる。生命の法則にも無知であり、たとえ二十年かけても、完全には生活の条件を学びきれない。いや、むしろ人生の終わりに至るまで、学びを必要とする存在なのである。

しかも、極めて弱く、無力な姿でこの世に送り込まれ、一～二年を経てようやく立ち上がることができ、十五年を経てようやく、利益と害を見分けることができるようになる。

人間は人間社会の助けを借りてはじめて、自らに益あるものを引き寄せ、有害なものを避けることができるのだ。

これにより明らかになるのは——人間の本来的な使命とは、学びによって完成へと向かうことであり、祈りによって礼拝を果たすことであるということだ。

すなわち——

「いったい誰の慈悲によって、このように賢明に導かれているのか？」

「いったい誰の寛大さによって、このように愛情深く育てられているのか？」

「いったい誰の恵みによって、このように繊細に、豊かに養われ、管理されているのか？」

と問い、これを知ることこそが、人間の役目なのである。

そして、自らの必要とする無数の事柄のうち、たった一つにしか手が届かぬことを知った人間は、必要を満たす御方のもとへ、自らの無力と貧困の言語で、乞い願い、祈り、訴えかけることになる。すなわち、人間とは無力と貧しさという「翼」によって、崇拜という高貴なる地位へと飛翔する者なのである。

要するに、人間はこの世界に、学びと祈りを通して完成に至るために送られてきた。その本性と可能性において、人間のすべては知識に依存している。

しかも、あらゆる真理の学問の、本質、源泉、光、霊魂とは、神の認識であり、その

認識の基礎中の基礎こそが、神への信仰なのである。

また、人間とは——限りなき無力をもって、果てしない災厄にさらされ、無数の敵の襲撃に常に晒されている。さらに、限りない貧しさを抱えながら、尽きることなき必要に取り囲まれ、果てしない望みに渴いている。

このように、人間の本来の根源的使命とは信仰の次に、「祈り」である。そして祈りとは、

まさに「崇拜」の核心そのものである。たとえばひとりの子どもが、自らの手の届かぬ願いを手に入れようとするとき、彼は泣くか、願うかつまり、行動によるか、あるいは言葉によって、無力の言葉をもって「祈る」。

すると、その願いはしばしば叶えられる。このように、人間も生命ある全存在の中において、最も繊細で、最も優美で、最もひ弱な存在である。

ゆえに、慈悲あまねき御方の御前においては、その「無力と弱さ」によって涙を流すか、あるいは「貧しさと必要」によって祈

ることが求められる。そうしてこそ、望むことが彼に従うようになり、あるいは、すでに従っているものに対して感謝を捧げることができる。

だが、もしそうでなければ自分よりはるかに小さな一匹の蚊にさえ騒ぎ立てるような哀れで生意気な子どもが、「私は自分の力で、到底従わせることなどできないはずの、自分より千倍も強大な驚異的な存在たちを支配し、自分の思考と策によって、私に服従させているのだ」

などとほざいて、恩恵に対して感謝せず、それを否定するようになればそれは人間という存在の本来の性質に真っ向から反するものであり、その者は、やがて厳しい懲罰に自らをふさわしくしてしまうであろう。

第五の点

信仰は、祈りを確かな手段として必要とし、人間の本性は、祈りを切実に欲する。それと同様に、全能の主もまた、「もしお前たちの祈りがなければ、お前たちに何の価値があるのか」といった意味の御言葉をもって、こう仰せになる。

قُلْ مَا يَعْبُؤُا بِكُمْ رَبِّي لَوْلَا دُعَاؤُكُمْ

「言え。『お前たちの主は、もしお前たちの祈りがなければ、何の重きを置こうか』」

また、別の聖句においてはこう命じている：

ادْعُونِي أَسْتَجِبْ لَكُمْ

「わたしを呼び求めよ、わたしはそれに応じよう」

しかし、あなたがこう言うかもしれない：
「何度も祈ったのに、叶わないではないか。なのにクルアーンの御言葉は、『すべての祈りに応じる』と述べているではないか？」

この疑問に対して、次のように答える。

「応じる」ことと、「願いをそのまま叶える」こととは、同じではない。

すべての祈りに対して、確かに応答はある。しかし、祈りをそのまま受け入れて、願った通りに与えるかどうかは、神の英知に委ねられている。

たとえば病気の子どもが、医者を呼んで言う。「お医者さん、診てください！」医者は答える。「はい、来ました。どうしまし

た？」と。子どもは言う。「この薬をください」だが医者、状況に応じて願ったそのままを与えることもあれば、より良いものを代わりに与えることもあるし、あるいはその薬が子どもに害を及ぼすと判断して、まったく与えないこともある。このように全知全能の主である神は、常に見ておられ、そばにおられる。それゆえ、仕えるしもべの祈りに対しては、必ず「応えてくださる」。そしてその応答によって、孤独や放置されたという恐怖を、主の臨在と応答によって、親しさと安らぎに変えてくださる。だが、これは人間の欲望や気まぐれによる勝手な命令口調ではなく、主の英知の要請に従う形で応じられるのである。

すなわちある時は願ったものそのままだと与えられ、ある時はそれより優れたものが与えられ、ある時はまったく与えられない、それは人間の益となるように計らわれているのである。

さらに言えば祈りとは、崇拜行為である。そして礼拝とは、その実を来世において結ぶもの、すなわち来世的報酬をもつ行為である。この世における目的とは、そのよう

な祈りや礼拝の時間帯を示すものであり、決してそれらの最終目的ではない。たとえば雨乞いの礼拝と祈願は、ひとつの崇拝行為である。雨が降らないことは、この礼拝の時間を知らせる合図である。この礼拝と祈りは、「雨を降らせるため」に行うものではない。もし、それだけを目的として祈ったとすればその祈りは、もはや純粋な崇拝行為ではなくなり、受け入れに値しないものになってしまう。同様に太陽が沈むことは、マグリブ（夕方）礼拝の時間を知らせるものである。また、太陽や月が蝕する時には、「日蝕・月蝕の特別な礼拝」という特定の礼拝が設けられている。というのも、昼と夜という「光のしるし」が一時的に覆われることは、神の威厳を示すひとつの啓示であり、神はその時、しもべたちを特別な礼拝へと招いているのだ。

この礼拝は、（月蝕・日蝕の継続時間や終了時刻は天文学的にすでに定められているため）その蝕を解除するために行うのではない。まったくそれと同様に雨が降らない状態は、雨乞いの礼拝の時間であり、災厄が広がるときや有害なものが襲いかかる時

は、特定の祈りの時間である。人はこうした時にこそ、自らの無力を痛感し、祈りと懇願をもって、全能なる主の御前へと避難し、救いを求めるようになる。だが、いくら多くの祈りを捧げても、もし災いが取り払われなかったとしてもそれをもって、「祈りが聞き届けられなかったとは決して言えない。

むしろ、こう言うべきである：「その祈りの“時間”は、まだ“終わっていない”」

もし神がその恩寵と慈悲によって災厄を取り除き給うなら、それはまさに「光に光を添えた」ものであり、その瞬間に祈りの時間は終わりを迎える。

このようにして明らかになるのは祈りとは、崇拝の秘義なのである。

崇拝行為とは、まったく純粹に、ただ神の御顔のためになされるべきものである。人はただ、自らの無力さをあらわにし、祈りによって神により頼むべきである。主権に介入してはならず、思慮や采配は神に委ね、神の叡智を信頼し、神の慈悲を疑ってはならない。

まことに真実として、明白な諸啓示が示している通り、万物の一つひとつが、それぞれ特有の賛美を捧げ、それぞれ固有の礼拝と、固有のひれ伏しを行っている。そして、全宇宙が神の御前へと捧げるものは、すべて「祈り」である。この祈りには、三つの主要な形がある。「本性の言語による祈り」、それは植物たちの祈りのようなものである。彼らは、持ち前の素質を通して、無限の施し手からそれぞれの形を求め、神の御名に映されるある種の顕現を望んでいる。「自然な必要の言語による祈り」、それは生命あるすべての存在が、自らの力ではまかなえぬ必需品のために行う祈りである。その祈りによって彼らは、「与えることにおいて無限である方」から命を維持する糧を求めている。「苦難と切迫の言語による祈り」、それは極限の状況に追い込まれたすべての命ある者が、無意識のうちに、確固たる叫びとともに「知られざる保護者」に助けを求める。だがその実、彼らは慈悲深き主に向かって祈っているのである。

これら三種の祈りは、妨げとなるものがなければ、常に受け入れられる。さらに、最

もよく知られた第四の形がある。それが「我々人間の祈り」である。この祈りも二つに分かれる。一つは、行為と言葉を通じた祈り、もう一つは、心と言葉を通じた祈り。たとえば、因果への取り組みも一種の「行動による祈り」である。因果を整えそろえることは、決して結果を自ら生み出すためではなく、身体の姿をもって神に願い求める礼拝的な態度を取ることである。

たとえば、畑を耕すことは慈悲の宝庫の扉を叩く行為に等しい。この種の行為的祈りは、無限の施し手の御名と御属性に向けて行われるものであり、ほとんど例外なく受け入れられる。もう一つの祈りは、言葉や心を通して、自分では手の届かない願いを求める祈りである。この祈りにおいて、最も重要で、最も美しく、最も甘美な果実とは「祈る者が悟ること」である。つまり、こう思う：「私の心の中の思いを聞いてくださるお方がいる。そのお方は、すべてに手が届き、私のすべての願いを叶えることができる。私の無力さを慈しみ、貧しさを救ってくださるのだ。」

されば、おお、無力なる人間よ！おお、貧しき人類よ！

祈りとは、神の慈悲の宝庫の鍵であり、尽きることなき力の源である。

それを手放すことなかれ。しっかりとそれにすがれ。そして人間存在の最高の高みに昇るのだ。まるで宇宙全体の祈りを、自らの祈りに統合する王者のように、まるですべての存在の名代、神の完全なるしもべのように、

أَيَّاكَ نَسْتَعِينُ

と唱えよ。そして——宇宙という大書の、最も美しき暦となれ。



第二の節これは、人間の幸福と破滅に関わる五つの機微から成っている。

人間は、「最も優れた構造（」のもとに創造され、あらゆるものを包含する驚くべき可能性を与えられた。それゆえ、人間は「最も卑しき低さ」から「最高の高み」まで、大地から神の御座まで、微粒子から太陽に至るまで、秩序立てられたすべての階層・位階・段階・深淵に、入り込むことも堕ち込むこともできる、試練の舞台へと投げ込まれた、力の奇跡にして、創造の帰結、驚異の技巧として、この世界へ送り出された存在である。

今まさに我々は、この人間の恐るべき向上と墮落の謎を、「五つの機微」において明らかにしよう。

第一の要点

人間は、宇宙のほとんどすべての種類に必要とし、関係を持つ存在である。

その必要は、世界のあらゆる場所に散らばっており、その願望は、永遠にまで延びて

いる。たとえば、一輪の花を欲するように、
広大な春さえも望む。一つの庭を愛するよ
うに、永遠の樂園をも希求する。一人の友
と再会を望むように、威光に満ちた美の御
方を見たいと渴望する。

そして別の場所にいる愛する者を訪ねたい
と思う時、その住処の扉を開く必要がある
ように、すでに中間世界に旅立った愛する
者たちの九十九パーセントを訪ね、永遠の
別離から解放されたいと願う人間は、この
世界全体の扉を閉じ、驚異に満ちた審判の
世界たる来世の門を開き、この世界を持ち
上げて、その代わりに来世を据えることの
できる絶対の力を持つ御方の御前に、祈り
求めることが必要である。

このような姿において、真に人間の「神」
となりうるのは、ただ一つ

すべてのものの手綱を握る者、すべての宝
を掌中に持つ者、あらゆる場に立ち会い、
いかなる場所にも遍在し、空間に超越し、
無力から完全に無縁であり、欠陥から清め
られ、不完全さから高く引き離された、こ
のような御方、すなわち「威厳に満ちた全
能者、美しさに満ちた慈悲深き御方、完全

にして賢明なる真理の主」のみが、人間の限りなき必要を満たしうるのである。

なぜなら、それを果たしうるのは、限りなき力と、全体を包み込む知識を持つ者のみだからである。されば、崇拜の対象としてふさわしいのは、ただその御方のみである。

されば——おお人間よ！　もしお前が、ただアッラーのしもべとして生きるならば、あらゆる被造物の上に立つ高貴な地位を得ることができる。だが、もし礼拝を忌み嫌い、自らをアッラーへの奉仕から逃れさせようとするならば、お前は逆に、最も無力な被造物たちにさえひれ伏す惨めなしもべとなってしまう。さらに、もし自我と能力に頼り、アッラーへの信頼と祈りを捨てて、高慢と虚偽の主張に身を委ねるならば、そのとき、お前は善と創造の面において、蜂や蟻よりも下に、蜘蛛や蠅よりも弱い者となる。

しかし、悪と破壊の面においては、山よりも重く、疫病よりも有害な存在と化すのである。まことに、人間という存在には、二つの相対する側面がある。一つは、創造と存在、善と肯定、そして能動的な働きの側

面であり、他方は、破壊と無、悪と否定、そして受動性の側面である。前者においては、人は蜂や雀よりも下に、蠅や蜘蛛にも劣るほどに無力であるが、後者においては、人は山や地、そして天をも超えるほどの影響を持つ。なぜなら、人は山や大地が担うことを拒み、力の限界を示して退けた一つの重荷を、自ら引き受けたからである。しかも、それによって人間は、彼らよりも広く大きな領域を担う者となった。

というのも、人が善を行い、創造の行為に関わるとき、それはただ自らの限界内で、手が届く範囲、力の及ぶ程度においてのみ可能である。しかし、もし人が悪を行い、破壊に手を染めるならば、その害は境界を越えて広がり、破壊の波はあらゆるところに波及するからである。たとえば、不信（クフル）は一つの悪であり、一つの破壊であり、肯定しないことという無である。しかし、この一つの罪は、全宇宙を貶め、アッラーのすべての御名を侮辱し、人間性そのものを辱めることを含んでいる。なぜなら、存在するすべてのものには、崇高な地位があり、重大な使命があるからである。

というのも、それらは「アッラーの書簡」であり、「アッラーの美の鏡」であり、「アッラーに仕える使者たち」である。

不信は、これらの被造物たちを、鏡としての尊厳、使命を帯びた存在としての価値、意味を帯びた徴としての地位から引きずり下ろし、無意味と偶然の戯れに貶め、変化と破壊にさらされる儚い物質に還元し、無価値と無意味、そして虚無の地位にまで墮とすからである。そしてまた、不信は、全宇宙とその中の存在が鏡として映し出しているアッラーの御名の精妙な模様と輝き、美しさを否定し、侮辱することでもある。さらに人間という存在は、アッラーの聖なる御名のすべてを見事に映し出す、韻を踏んだ智慧の詩篇であり、永遠なる樹の全器官を内に秘める種子のような奇跡の存在であり、天と地と山を凌ぐほどの、アッラーから託された重大なる信託（アマーナ）の担い手であり、天使たちよりも優越する地上の代理者（ハリーファ）という地位の所有者である。

だが、不信はこの人間を、儚く消えゆく最も卑しき獣以下の存在へと突き落とし、よ

り哀れで、より無力で、より貧しいものとし、意味もなく、混乱に満ち、すぐに崩れるつまらぬ看板のような存在に貶めるのである。

要するに、命令的自我は破壊と悪において限りない罪を犯しうるが、創造と善においてはその力は極めて乏しく、ごくわずかである。確かに一つの家を一日で破壊できるが、百日かけてもそれを築くことはできない。しかしもしも己の我執を捨て、善や存在の力をアッラーの恩恵に求め、悪と破壊を、そして自己の力への依存を放棄し、悔悟して完全なる下僕となるならば、そのとき彼は次のアーヤの秘密に与ることになる：

يُدِّلُ اللَّهُ سَيِّئَاتِهِمْ حَسَنَاتٍ

すなわち、彼の内に潜む限りなき悪の能力は、限りなき善の能力へと転じるのであり、「最も美しき造形」としての真価を得て、崇高なる高みへと昇るのである。されば、ああ不注意なる人間よ、見よ、アッラーの恩寵と慈悲の深さを。罪を一つで千と記すことも、善を一つだけ記し、あるいは記さないことすら正義であるはずなのに、アッ

ラーは一つの罪を一つとして数え、善行を十として、時に七十、時に七百、時に七千として数え給う。そしてこの奥義より、次のことをも理解せよ。あの恐るべき地獄に墮ちることは、行いに対する報いであり、まさに正義そのものである。しかし樂園へと入ることは、純粹にして完全なるアッラーの恩寵によるものである。

第二の要点：

人間には二つの側面がある。一つは自我に基づきこの現世の生活に目を向ける面であり、もう一つは礼拝において永遠の生命に目を向ける面である。前者の観点から見れば、人間とは実に哀れなる被造物である。彼の持ち得る資本といえは、選択というわずか一本の髪の毛にも満たぬ自由意志の断片、力といっても極めて弱々しい獲得能力、生命においてはすぐに消えゆく一筋の火花、寿命においてはすぐに過ぎ去る束の間の時間、存在においてはすぐに朽ち果てる小さな肉体にすぎない。そしてこの儚き状態のまま、万象の層に敷き詰められた無数の種族の数知れぬ個体の中に、ひときわ弱く繊細なる一個体として存在している。

しかしながら第二の側面、ことに礼拝に向かうときの無力と貧困の観点から見るならば、実に広大なる可能性を秘め、極めて大いなる重要性を帯びている。というのも、英知に満ちた創造主は、人間の靈的本質のうちに限りなき巨大なる無力と、測り知れぬほどに深き貧困を内包させ給うたからである。それは、無限の力を持つアッラー、慈悲に満ちたアッラー、富みにおいて完全なるアッラーの無限の顕現に、すべてを映し出す広大なる鏡となるためである。

まことに人間とは一つの種子に似ている。いかにしてその種子に、アッラーの力によって靈的かつ重要な装置が与えられ、定めに従って繊細にして尊き設計図が授けられていることか。それは、土中にて努力を重ね、その狭き世界から抜け出して広大なる空気の世界へと至り、創造主に対してその潜在力の言語により「木となる」ことを願い、自らに相応しき完成を得るためである。しかしもし、その種子がその気質の歪みにより、授けられた靈的装置を土中にて有害な要素を招くことに用いてしまうならば、狭き世界のうちにてわずかな時を経て、

なんの益ももたらすことなく腐敗し朽ち果てるであろう。だがその種子が、授けられた靈的装置を次のアッラーの創造命令に従って美しく活用すれば：

فَالِقُ الْحَبِّ وَالنَّوَى

すなわち、「種を割き、核を破る御方」たるアッラーの命に従い、それを正しく用いるならば、狭き世界より抜け出して、果実をもたらす大樹となり、その微小なる個別の実体と靈的本質とは、巨大なる普遍的真理の姿へと転化するのである。

まさしくそれと同じように、人間の本質には、アッラーの力により重要な諸器官が、そしてアッラーの定めによって貴重な設計図が託されている。もし人間が、この狭き地上世界という領域において、現世の生活の土壌の下で、その靈的諸器官を自我の欲望に費やすならば、墮落した種子のように、つかの間の享樂を得るために、短き生涯のうちに、狭苦しく、苦悩に満ちた状態で朽ち果て腐敗し、その靈魂に道德的責任の重荷を負わせたまま、この世から去るであろう。

しかしもし、その潜在力という種子を、イスラームの水によって育み、信仰の光で照らし、礼拝という土壌の下で養い育て、クルアーンの命令に従い、その靈的諸器官を眞の目的へと向けるならば、まことに彼は、想像界と中有界において枝葉を広げ、来世と樂園において限りなき完成と恩寵に源づく、永遠に存続する真理の樹の靈的装置をすべて備えた、貴き種子、光彩を放つ精巧な機構、そしてこの宇宙の樹における祝福された、光に満ちた果実となるのである。

まことの意味における向上とは、アッラーから人間に授けられた心臓、靈秘、靈魂、理知、さらには想像力やその他の諸力が、永遠の生命へとその面を向け、それぞれが自らにふさわしい仕方で、特有の奉仕たる礼拝に従事することである。もしそうでなく、誤った道を歩む者たちの「向上」なるものが、現世の生活のあらゆる繊細さの中へ沈み込み、あらゆる種類の享樂を一最も卑俗なものに至るまで一味わうことを指すとするならば、そしてそのために彼のすべての靈的感觉器官と心と知性とを、惡を命令する魂の奴隷となし、これに奉仕させて

しまうならば、それは向上ではなく、墮落である。私はこの真理を、ある幻想的な出来事において、次のような寓意の中に見た。

私は大きな都市に入り、その中に壮麗な宮殿が多く建ち並んでいるのを見た。いくつかの宮殿の門前に目をやると、まるで華やかな劇場のような賑やかさと魅惑に満ち、あらゆる人々の目を引きつけ、彼らを楽しませていた。私はよく観察してみると、宮殿の主が門に出てきて犬と戯れ、その戯れを助けていた。婦人たちは見知らぬ若者たちと甘美な語らいにふけていた。成長した娘たちは子どもたちの遊びを取り仕切り、門番までもが彼らに命じる俳優のような振る舞いをしていた。そのとき私は悟った——かの壮麗な宮殿の内部は空虚であり、繊細なるすべての任務は放棄されており、彼らの品性は墮落していたゆえに、このような姿が門前に現れていたのだと。

さらに私は進んで、また別の壮麗な宮殿に会った。門前には忠実なる一匹の犬が伏し、粗野で無口な門番がおり、全体としては地味で静かな雰囲気が漂っていた。私は不思議に思った。なぜあれはあのようで、

これはこうなのかと。中へと入ってみると、そこは非常に賑やかであった……部屋は部屋を重ね、それぞれが異なる繊細なる任務に従事していた。最初の階では男たちが宮殿の管理と運営に携わっており、その上の階では娘たちや子どもたちが学問に励んでいた。

その上の階では婦人たちが、極めて繊細なる芸術と美しい文様の制作に従事していた。さらに最上階には、宮殿の主が王（パーディシャー）と文通を行い、人々の安寧を確保するため、また自らの完成と向上のために、彼に固有なる高尚な任務に従事している姿を見た。私は姿を見せていなかったもので、「立入禁止」と言われることもなく、その宮殿内を歩くことができた。やがて私は外へ出て見渡すと、その都市の至る所に、この二種の宮殿があるのを目にした。私は人々に尋ねたところ、彼らはこう言った。

「あの門前だけが賑やかで中身が空虚な宮殿は、不信仰者たちの上流階級と、迷妄の徒のものである。他方の宮殿は、品位あるムスリムの偉人たちのものである」と。次に私はある隅に位置する一つの宮殿に出会

った。その上に「サイド」という名前が記されていた。私は興味を惹かれ、さらによく見ると、まるで自分自身の姿がその上に映っているように思えた。その驚愕のあまりに叫び声をあげたところで、意識を取り戻し、目を覚ました。

この幻想的な出来事を、今から君のために解釈しよう。アッラーがこの出来事に善をもたらしますように。

さて、この都市とは、人間の社会生活であり、人類文明という都である。そして、あの宮殿の一つ一つは、すなわち一人の人間を表している。宮殿の住人たちとは、人間の中にある目や耳、心、靈秘、靈魂、知性といった繊細なる感覚器官であり、また欲望と衝動、情欲の力や怒りの力といったものである。それぞれの人間において、これら一つ一つの精妙な感覚器官には、それぞれ異なる礼拝の任務がある。それぞれが独自の悦びと苦悩を持っている。欲望や衝動、情欲と怒りの力などは、まさに門番や犬に相当するものにすぎない。さて、これら高貴な感覚器官を、欲望や衝動に服従させ、その本来の奉仕の任務を忘れさせるこ

とは、まさに墮落であつて、向上ではない。それ以外の諸点については、君が自ら解釈することができよう。

第三の要点：

人間は、その行為と実践の面において、また物質的な努力という観点において、弱き動物であり、無力なる被造物である。そのような側面における彼の支配と所有の範囲は極めて狭く、己が手を差し伸べて届く限りのものに過ぎぬ。実際、手綱を人間に委ねられた家畜たちでさえ、人間の弱さ、無力さ、怠惰から一部の性質を受け継いでいる。ゆえに、野生の同類と比較すれば大きな違いが見られる（たとえば、家畜の山羊と牛は、野生の山羊や牛に比して顕著に劣る）。しかしながら、その人間は、受動性と受容、祈願と請願の側面において、この世という宿屋において高貴なる旅人である。そして彼は、限りなき慈悲の宝を彼に開示し、無数の美しき被造物と奉仕者たちを彼に従属させた、限りなく寛大なる御方の賓客なのである。その旅人の憩いと観賞と享受のために、かくも広き場が準備され、設けられている。その範囲は、半径一すなわ

ち中心から外縁まで一が目の届く限り、あるいは想像の及ぶところまで、広く長く延びているのである。

さればもし人間が、自我に依拠し、現世の生活を夢想の目的とし、生計の苦勞の中で一時的な快樂のために働くならば、彼は極めて狭き領域の中に閉じ込められ、やがては沈んで消えてゆく。かくのごとき者に授けられたあらゆる器官・道具・精妙なる感覺器官たちは、彼に対して不満を抱き、来世において彼に不利な証言をし、訴えを起こすであろう。されどもし彼が己をアッラーの賓客であると自覺し、寛大なる御方の許しのもとにその短き生の資本を費やすならば、彼はかくも広き場において、永遠の命に向けて善き労働に励み、また憩いを得る。そして彼は「至高なる高み」にまで登りうるのである。またこのように生きたならば、彼に与えられたあらゆる器官と道具たちは彼に満足し、来世において彼に有利なる証言を立てよう。

まことに人間に与えられし奇妙なる諸器官は、この取るに足らぬ現世の生活のために与えられたのではない。むしろ、極めて重

大なる来世の命のために授けられたのである。というのも、人間を動物と比較したならば、器官と道具の豊かさにおいては極めて豊かであり、動物を百倍も上回る。しかし現世の快樂と動物的生活という観点では、彼は百倍も劣る存在である。なぜなら彼が得るすべての快樂には、必ず苦痛の痕跡がある。過ぎ去った時の苦痛と、これから訪れる未来の恐れ、そしてあらゆる快樂に付きまとう消失の苦しみが、その味を損ない、喜びに影を落とす。されど動物はそうではない。苦痛なき快樂を得、悲しみなき喜びを享受する。過ぎ去った時間の苦しみも、未来の恐れも、彼を悩ませはしない。安心して生き、憩い、そしてその創造主たるアッラーに感謝を捧げるのである。

ゆえに、最も美しき造形の姿に創造された人間が、その思念を現世の生活にのみ限定すれば、資本としては百倍も動物より勝っているにもかかわらず、百倍も雀のような小動物より劣った者となる。この真理を、別の箇所の一つの譬えをもって示したことがあった。ここに再びそれにふさわしい機

会を得たゆえ、再度その譬えを繰り返すこととする。

ある人が、ある使用人に十枚の金貨を与え、「特別な布地から一着の衣を仕立てよ」と命じた。もう一人の使用人には、千枚の金貨を与え、ある小さな紙片にいくつかの指示を書きつけてその使用人の懐に入れ、市場へと送り出した。最初の使用人は、十金で最高級の布を用いて見事な衣を仕立て上げた。ところが第二の使用人は愚かにも、最初の者を見習い、懐の中の指示書を読むことなく、一軒の店に入り千金を渡して衣を一着所望した。良心を欠いた店主は、最も劣った布地で一着の衣を与えた。その不幸なる使用人が主人の御前に戻ったとき、厳しい叱責を受け、恐るべき罰をこうむった。ごくわずかでも分別のある者であれば理解できよう。すなわち、第二の使用人に与えられた千金は、一着の衣を得るためのものではなく、極めて重要な商いのための資本であったのだ。

まさしくこれと同様に、人間に備わった精神的装置や霊的器官、すなわち人間性の精妙な感覚のすべては、それぞれが動物と比

較して百倍もの展開を見せている。たとえば、美のあらゆる段階を識別できる人の眼、味覚のあらゆる種類の繊細な風味を識別できる舌の味覚器、真理のすべての繊細な理を貫く人の知性、あらゆる種類の完成を求める人の心といったさまざまな器官、装置はどこにあり、ただ一つか二つの程度に発達した単純なる動物の器官はどこにあるか。動物においては、ある特定の行為に特化した（その動物に特有の器官）がより高度に発達している場合もある。されどその発達はいくまで特殊的であり、全体的な意味においては及ぶべくもないのである。

人間がその装置の面でかくも豊かにされているのは、以下の秘密による。すなわち、理性と思考を授かっているために、人の諸感覚は他の生物と比して著しく発達・展開しており、また必要とするものが極めて多種多様であるがゆえに、さまざまな感情が生じ、感受性もまたきわめて多様化している。また、その本性が包括的であることから、無数の目的に向かう欲望の拠り所ともなっており、さらに生来の本質に多くの役割が課されているために、あらゆる道具や

器官が顕著な発展を見せている。そしてまた、礼拝のあらゆる形に応じうる本性で創られているがゆえに、すべての完成の種を宿す潜在力が備わっているのである。このように、かくも豊かな装備と、膨大な資本は、もとより取るに足らぬはかない現世の生活のために与えられたものではない。まさにこのような人間の本来の使命とは、無数の目的に向けられた種々の役割を果たしつつ、自らの無力・貧しさ・欠陥をアッラーへの奉仕というかたちで表明し、全体的な眼差しをもって被造物の讃美を目撃し、証言し、恩恵の中にアッラーの慈愛の援助を見て感謝し、被造物の中に顕れる主の力の驚異を鑑賞して、洞察の眼をもって深く省察することにほかならない。

おお、現世に心を奪われ、儚い世の命に溺れ、「最美の姿に創られた」という奥義を忘却した人よ。このはかない現世の命の真相を、かつて「過去のサイード」がひとつの幻想的体験において見た。そしてそれは、彼をして「新しきサイード」へと生まれ変わらせた。今こそ、その譬えの幻想譚を聞いてほしい。

私は、ひとりの旅人として道を歩んでいた。長い道程へ向けて、あるいは遣わされていた。そして私を遣わした御主人は、私に割り当てた六十枚の金貨のうち、日ごとに少しずつ幾ばくかを与えていた。私はその金を用いて、とある愉快的な宿に辿り着いた。その宿にて一夜、十枚の金貨を博打や遊び、虚名を求める道に費やした。朝になれば、手元には一文も残っていなかった。商いをなすこともなく、これから向かうべき旅先のために一つとして物を得ることもできなかった。ただ残ったのは、その金で得た痛み、罪、そして遊興から生まれた傷、痣、悲しみばかりであった。

私はこの悲惨な状態にあって打ちひしがれていたとき、突如、ひとりの男が現れて私に言った。「お前は持っていた資本をすべて無駄にした。罰を受けるにふさわしい。そして向かうべき地には、一文無しのまま手ぶらで行くことになるだろう。だがもし理性が残っているのなら、悔悟の扉はまだ開かれている。」

その人はさらに言った。「これから与えられる残りの十五枚の金貨のうち、手にする

たびにその半分を予備として蓄えておきなさい。つまり、これから向かう先で必要となる品々を買うためだ。」私は見た。私の欲望はこれを受け入れようとしなかった。するとその人は「では三分の一だけでも」と言った。しかし、私の欲望はそれにも従おうとしなかった。さらに「せめて四分の一だけでも」と言ったが、私は習慣となっていた行動を断ち切れなかった。ついにその人は怒りに顔をそむけ、立ち去ってしまった。

すると、場面が一変した。私は、まるで地下のトンネルを落ちていくような速度で突き進む鉄道列車の中にいるのを見た。私は恐怖にとらわれたが、もはやどこへも逃げることはできなかった。奇妙なことに、その鉄道の両側には非常に魅力的な花々や美味しそうな果実が並んでいた。私は愚かで未熟な者のように、それらを見て手を伸ばし、花を摘み、果実を手に入れようとした。だが、それらの花と果実は棘をもち、触れるたびに手に刺さり、血を流し、鉄道の進行によってそれらと別れる際には、私の手を傷つけ、甚だしい代償を払わせた。

そのとき突然、列車内の一人の従者が言った。「五クルシュを出せば、好きなだけその花と果実を与えよう。だが金も払わずに勝手にそれらに触れれば、百クルシュ分の傷を負うことになる。そればかりか、罰も受けるのだ。許可なく摘むことはできない。」私は焦りの中で、「このトンネルはいつ終わるのか」と頭を出して前方を見た。すると、トンネルの先には門ではなく、いくつもの小さな穴が口を開けていた。そしてその長い列車から、人々がひとりひとりその穴へと投げ込まれているのを見た。

私の目前にもひとつの穴が見えた。その両脇には二本の墓標が立てられていた。私は好奇心からじっとそれを見つめた。そして墓標に「サイード」の名が大きく記されているのを見てしまった。私は悲しみと驚きのあまり「嗚呼」と声を上げた。すると、かつてあの宿の前で私に忠告してくれた人物の声が聞こえた。「やっと正気に戻ったか？」と。私は答えた。「はい、ようやく悟りました……しかしもはや力がありません。為すすべもないのです。」すると彼は言った。「悔い改めよ、アッラーに委ね

よ。」私は答えた。「はい、悔い改め、アッラーにすべてを委ねます。」

そして目が覚めた。そこにいた「旧きサイド」はもはやおらず、「新しきサイド」としての自分を認めた。

この幻のような出来事を、アッラーが良きものとされんことを願い、私はその一、二の部分から自ら解き明かすこととし、それ以外の側面については君自身が読み解いてほしい。

この旅路とは、霊の世界から始まり、母の胎を経て、青年期、老年期、墓、バルザフ、復活、橋を越えて永遠の住処へと至る旅である。そして六十六枚の金貨とは、すなわち六十年の寿命のことである。私がこの幻を見たとき、自らを四十五歳と推定していた。正確な記録はなかったが、残る十五年のうちの半分を来世のために捧げるよう、クルアーンの純粹なる弟子が私を導いてくれたのである。

その宿とは、私にとってはイスタンブルであった。その蒸気機関車は時間であり、各年が一両の車両である。そのトンネルは現世の人生を象徴し、その中に咲く棘ある

花々や実とは、すなわち許されざる快樂や禁じられた遊興のことである。それらに触れることで、儚さを思い知る心の痛みが心臓を引き裂き、別離の際には魂を傷つけ、さらに罰も科される。

列車の従者が言った「五クルシュを出せば、欲しいだけ与えよう」とは、こう解釈されるべきである。すなわち、人間が合法的な努力によって正当な範囲で得た喜びや快樂は、それ自体で十分であり、禁忌に手を出す必要などないのである。

残りの意味については、君自身が読み解くがよい。

第四の要点

人間はこの宇宙の中で、極めて繊細で可憐な子どもに似ている。その弱さには大いなる力があり、その無力さには偉大な権能が秘められている。なぜなら、その弱さの力と無力さの権能によってこそ、存在の諸事は人間に従わせられているからである。もし人間が己の弱さを悟り、言葉で、姿勢で、振る舞いで祈りを捧げ、無力さを知って援助を乞い、支配されたことへの感謝をもって願いを述べるならば、その望みは驚くほ

ど実現され、目的とするものがかくも従うことになる。しかもこれは自らの持つ力の百分の一にも満たない能力では到底及び得ぬことである。だが、ときに人は、自らの状態が語る無言の祈りによって与えられた恩恵を、誤って自分の能力で得たと思い込む。たとえば、雛鳥のその弱さが親鳥を、時に獅子にも飛びかからせるほど駆り立てる。新たに生まれたばかりの獅子の子は、その猛々しい親を自らに従わせ、飢えを忍ばせ、自らは満腹に過ごす。そこには、弱さの中に潜む力と、慈悲のまなざしがある。

ちょうど、我が儘な子どもが泣いたり、物を求めたり、悲しげな様子を示すことによって、望むものに次々と手が届き、強者たちをすら従わせるのと同じである。その欲する一つひとつのものに対し、自らの力では千に一つも届かぬというのに、わずかな指で英雄をも動かすのは、その弱さと無力さが慈しみと庇護の情を掻き立てるからにほかならない。もしこのような子どもが、庇護と慈愛を否定し、自分の力でそれらに従わせたと傲慢に語るならば、愚かしい慢

心のゆえに、当然ながら厳しい叱責を受けるであろう。

人間もまた、もしその創造主アッラーの慈悲を否定し、叡智を非難するような形で、恩恵に対して忘恩の態度を示し、カールーンのように

إِنَّمَا أُوتِيْتُهُ عَلَىٰ عِلْمٍ

すなわち『私は自分の知識と力によってこれを得た』と主張するならば、必ずや罰の平手に値する存在となるであろう。

ゆえに知られるべきは、この目に見える人間の支配のごとき威厳と、人類の進歩および文明の完成とは、決して人間の招き寄せたものでも、征服や戦いの結果でもなく、ただ彼の弱さのゆえに従わせられ、無力のゆえに助けられ、貧しさのゆえに施され、無知のゆえに啓かれ、必要のゆえに与えられたものであるということである。すなわちこの支配の根底にあるものは、力や知識による勝利ではなく、主の慈愛と憐れみ、恩恵と英知である。例えば、目を持たぬ蠍や足のない蛇といった小さき虫にさえ屈するほどの弱き人間に、ある小さな虫からは絹を着せ、毒を持つ蜂からは蜜を味わわせ

てくださるのは、決して彼自身の能力ではなく、まさしく彼の弱さがもたらした神の支配と恵みのしるしに他ならない。ゆえに人よ、もしこの真理がそうであるならば、驕りと自己中心を捨て、主の御前において己の無力と弱さを助けを求める言葉と行いによって表し、貧しさと欠乏を嘆願と祈りをもって訴え、神の僕たる身を明らかにせよ。そして言うがよい、

「حَسْبُنَا اللَّهُ وَنِعْمَ الْوَكِيلُ」と。

かくして魂は高く昇るのである。またこう言ってはならぬ、「私は取るに足らぬ存在である。この私に何の意味があるというのか。全宇宙が、すべてを知りすべてを支配するお方の御手によって、わざわざ私のために従わせられ、私から全的な感謝が求められているなどとは信じがたい」と。これこそが、恩恵を知らぬ愚かなる言である。

あなたは確かに、自己とその肉体的な姿においては、無に等しい存在である。しかしながら、その使命と位置づけの観点からすれば、あなたはこの威容ある宇宙の精緻な観察者であり、この英知に満ちた万有の雄弁なる語り手であり、この世界という書物

を理解し熟読する知性的な読者であり、称賛の念をもって被造物の讃美を見つめる観照者であり、崇敬を集める作られしものたちの礼拝における指導者であるという地位にあるのである。

まことに、人間よ、あなたは植物的肉体において、また獣性に依拠する自己においては、取るに足らぬ一片であり、貧しき一部分であり、無力なる存在であり、宇宙という激流のなかで翻弄されるささやかな生物にすぎない。しかし、アッラーの愛の光を内包した信仰の光明に照らされ、イスラームという修養により完成へと導かれるならば、あなたは人間性において、被造物としての従属のうちに一つの王であり、一なる点のうちに全体を包含する者であり、小さき姿のうちにひとつの世界であり、卑しき身のうちにありながら広大な監督の地位にある観察者であり得る。そしてあなたはこう口にすることができよう——「わが慈愛深き主は、この世界をわたしにとっての家となし、月と太陽をその家に灯る燈となし、春をひと束の花のように、夏を恩恵の食卓のように、動物をわたしへの奉仕者と

し、植物をその家を飾る美しい調度とされた」と。

要するに——もしあなたが自己とシャイターの囁きに耳を傾けるならば、最も卑しき者の地位へと落ちるであろう。だが、もし真理とクルアーンに耳を傾けるならば、最も高き高みへと登り、宇宙の美しき尺度としての存在となるであろう。

第五の要点

人間はこの世に、任務を帯びた客人として送られた存在であり、きわめて重要な資質を与えられている。そしてその資質に応じた重大な任務が委ねられている。さらに、人間をその目的と任務へと向かわせるために、強力な励ましと恐ろしい脅しが用意されている。別の箇所でも詳述した人間の任務とアッラーへの奉仕の根本原理を、ここに簡潔にまとめよう。そうすれば「最も美しく形づくられた者」という秘密も明らかとなるであろう。

人間はこの宇宙に来てから、二つの側面においてアッラーへの奉仕を担っている。一つは、アッラーを目にすることはできぬが、

それでも内面からの観想と思索を通じて行う奉仕であり、もう一つは、アッラーを目前に仰ぐかのような臨在感をもって行う奉仕と祈念である。

第一の側面とはこうである——宇宙において顕現するアッラーの主権の威厳を、服従をもって承認し、その完全さと美を畏敬と驚嘆をもって見つめることである。ついで、アッラーの神聖な御名の刻印である精妙な創造の数々を、互いに見せ合い、その意味を宣言する伝達者・宣告者となることである。さらに、ひとつひとつが内に秘められた靈的宝庫のようである御名の真価を、理性の天秤で測り、心の識別によって讃嘆し、価値を認識することである。次に、アッラーの御力の筆によって綴られた文書としての被造物の頁、地と天の書簡を、驚嘆をもって黙読し、深い思索に耽ることである。そしてまた、この万物に満ちる装飾や繊細な技を美として愛で、それを生み出した美と莊嚴の創造主に対する知識と愛慕を育み、その創造主の御前へと昇り、御憐憫と御親しみを得たいと願い求めることなのである。

第二の側面は、臨在と語りかけの場である。すなわち、作品から創造主へと心を向けることによって始まる。見ると、一人の威厳と莊嚴の創造主が、自らの創造の奇跡をもって御自身を知らしめようとし、認識されることを望んでおられる。人間はそれに対して信仰と認識によって応える。次いで見ると、一人の慈愛あふれる養い主が、御慈悲の実りををもって御自身を愛させようとされる。人間はそれに対し、愛を捧げることに全身全霊を傾け、アッラーへの奉仕のみに自らを捧げて、主の愛に応える。さらに見ると、一人の寛大な恩恵の主が、物質的にも精神的にもあらゆる恩恵の甘美によって人間を育てている。人間はそれに対し、行いと言葉、態度、さらには可能であればすべての感覚器官と与えられた道具のすべてを動員して、感謝と讃美と賛歌をもって応える。さらに見ると、一人の壮麗にして美しき御方が、この被造物の鏡に御威厳と完全さ、美と壮麗さを映し出し、注意を引かんとしておられる。

人間はそれに対し、「アッラーフアクバル」「スブハーナッラー」と唱え、自己を無に

し、驚嘆と愛慕のうちに平伏する。さらに見ると、一人の完全に富める御方が、完全なる寛大さのうちに、限りなき宝の蔵と財を開示しておられる。人間はそれに対し、崇敬と賛美のうちに、完全なる貧しさをもって求め、願いを捧げる。さらに見ると、創造の主が地上をひとつの展示場のように設え、そこにあらゆる美術的技巧を陳列しておられる。人間はそれに対し、「マーシャアッラー」と感嘆し、「バーラカッラー」と称賛し、「スブハーナッラー」と驚嘆し、「アッラーフアクバル」と賛嘆する。さらに見ると、一なる方にして唯一の御方が、この宇宙という宮殿の隅々に、比類なき印章をもって、御自身のものであるという証を刻印し、唯一性の徴（しるし）をそこに描き、宇宙のあらゆる地にその御旗を立て、主権と養育を宣告しておられる。人間はそれに対し、承認と信仰、唯一性の告白と確信、証言と奉仕によって応える。このような奉仕と観想によってこそ、人間は真の人間となり、最も美しく創られた者としての姿を示すことができる。信仰の恩寵によって、信頼に値し、地上の安全な代理者としての資格を得るのである。

おお、最も美しい形において創られながら、自らの誤った選択によって最も卑しき所へと落ちてゆく無自覚なる人間よ、我が言葉に耳を傾けよ。かつて私もおまえと同じように、若さの酔いに浸り、無知の帳のなかでこの世を快く美しいものと見なしていた。だが、その若き酩酊から覚め、老いの朝を迎えたとき、かつて美しいと信じて疑わなかったこの世が、もし来世へと向かわぬなら、いかに醜惡な顔をしていたかを目の当たりにした。そして、来世へと向かうその真の顔が、いかに美しいものであるかを見出したのである。それについては『第十七の言葉』第二部の219-220頁に記された、二つの真理の書板を見よ。おまえもまた、自らの目でそれを確かめるがよい。

第一の書板は、迷妄の徒と同じように、だが酔いに溺れることなく無知の帳によってかつて私が見た、無自覚の者たちの世界の真の姿を描写している。

第二の書板は、導きと平安のもとに生きる者たちの現実の世界を示唆している。これらは、以前記したままの様式で残してある。詩のように見えるかもしれぬが、詩ではない。

سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ
الْحَكِيمُ

رَبِّ اشْرَحْ لِي صَدْرِي وَيَسِّرْ لِي أَمْرِي وَاحْلُلْ
عُقْدَةً مِنْ لِسَانِي يَفْقَهُوا قَوْلِي

اللَّهُمَّ صَلِّ وَسَلِّمْ عَلَى الذَّاتِ الْمُحَمَّدِيَّةِ اللَّطِيفَةِ
الْأَحَدِيَّةِ شَمْسِ سَمَاءِ الْأَسْرَارِ وَمُظْهِرِ الْأَنْوَارِ وَ
مَرْكَزِ مَدَارِ الْجَلَالِ وَقُطْبِ فَلَكَ الْجَمَالَ اللَّهُمَّ بِسِرِّهِ
لَدَيْكَ وَبِسِيرِهِ إِلَيْكَ آمِنٌ خَوْفِي وَ أَقْلُ عِشْرَتِي وَ
أَذْهَبْ حُزْنِي وَ حَرِّصِي وَ كُنْ لِي وَ خُذْنِي إِلَيْكَ
مِنِّي وَ ارْزُقْنِي الْفَنَاءَ عَنِّي وَ لَا تَجْعَلْنِي مَفْتُونًا بِنَفْسِي
مَحْجُوبًا بِحَسِّي وَ اكْشِفْ لِي عَنْ كُلِّ سِرٍّ مَكْتُومٍ يَا
حَيُّ يَا قَيُّوْمُ يَا حَيُّ يَا قَيُّوْمُ يَا حَيُّ يَا قَيُّوْمُ وَ ارْحَمْنِي
وَ ارْحَمْ رُفَقَائِي وَ ارْحَمْ أَهْلَ الْإِيْمَانِ وَ الْقُرْآنَ آمِينَ
يَا أَرْحَمَ الرَّاحِمِينَ وَ يَا أَكْرَمَ الْأَكْرَمِينَ
وَ آخِرُ دَعْوِيهِمْ أَنْ الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ